02 認定こども園 こどもむら

#自主性 #社会の縮図 #未就園児・学童 #認定こども園

つながりを大切に、多様なかかわりを

2020年9月から開始した、子育て支援センター「にじいろのおうち」。栗橋さくら幼稚園、同じく幼保連携型認定こども園のさくらのもりに3歳児入園を希望している子どもと保護者が対象。

生き生きと主体的に過ごす園の子どもたち

こどもむらの幼保連携型認定こども園栗橋さくら幼稚園では、子どもたちの自主性・自発性を大切にしています。「子どもたちがよく話し合っていて、担任がそれを遠巻きに見ているという光景をよく見ます」と言うのは同園長の塚越さん。

秋に新米が取れて、収穫祭で食べようということになると、「じゃあどんなおにぎりにしようか」と子どもたちが話し合いを始めたそう。家庭のおにぎりの味はいろいろで意見はバラバラ。仕切り役の子を中心に話し合いは進み、結果、4つあるクラスはそれぞれ違う、おもしろいおにぎりを作りました。「話し合う中で声が大きくなるような場面もありますが、そうして徐々に折り合いの付け方を学んでいきます」。

在園児以外の子どもたちもつないでいく

こどもむらには、子育て支援センターや学童施設もあります。こどもむら理事長の柿沼さんは「いまは、家庭での育ちも、家族の在り方も多様。3歳入園児の子どもたちの様子にはかなり差がある」と話します。さらに、保護者が孤立しやすいのも未就園の時期。未就園の子どもと保護者への支援は、入園後の子どもたちの育ちや保護者との信頼関係構築のために、とても大事だと考えています。

また、学童施設を利用する子の中には、園の5歳児がしているような話し合いにうまく参加できない子もいます。学童施設と園の職員が連携し、園の延長線上のような環境や経験を保障することで、本来の育ちにつなげていくことができます。

学童施設は、ガレージのようなスペースがあり、体を動かしたり木工活動ができたりする。

コロナ禍の影響は……？

自粛期間中、栗橋さくら幼稚園では、4・5月にやるはずだった保育の内容をDVDにして各家庭に配布。あそびや製作以外に、園で子どもたちがやっている炊飯や雑巾がけなどもあり、好評でした。でも、それ以上に保護者がうれしかったと言うのが、定期的に送っていた園からの情報メール。先の見えない状態への不安などがあったのだなと感じました。それを受けて、自粛明けにも、保育内容の変更点などはなるべく細かく、子どもの育ちへの思いを添えて発信するようにしました。

保育自体はもともと、好きなことに自主的に取り組むコーナーを中心とした保育形態だったので自然と分散し、あまり変える必要がありませんでした。

スーパーマーケットとは違う楽しさ！

小学生に人気の駄菓子屋。コロナ禍以降、店の外に通路を作って再開した。

地域の人が利用できるカフェ。自粛期間中もテイクアウトで活躍。

DATA

取材

認定こども園こどもむら
（埼玉県）

埼玉県久喜市に、幼保連携型認定こども園、小規模保育所、企業主導型保育所、学童保育所、子育て支援センターを運営し、カフェや駄菓子屋も併設。子育て支援センターでは、訪問型の支援や、児童向けの学習支援なども行い、幅広い年齢の子どもを見守る、村のようなコミュニティの形成を目指している。

社会と園をつないでいくと……

理事長
柿沼平太郎さん

園での子どもたちの育ちにもつながるんですね

栗橋さくら幼稚園園長
塚越優子さん

生きる力って？

多様な人がいる社会で生きていくということ

「個性のある仲間がいて、大人がいて、大人にもいろいろいて……。園も、社会の縮図と言えます」と柿沼さん。そして、栗橋さくら幼稚園では、まず大人同士が互いの個性を受け入れ合うような文化があると言います。下に紹介するのは、そんな栗橋さくら幼稚園の5歳児クラスのエピソード。この様子を見た柿沼さんは「まだ6月頃だったのですが、もう保育目標を達成したなと思いました(笑)」と振り返ります。この時のクラスの担任は、この子どもたちの行動をごく自然に受け止めていたそうで、「それもまたすごいことだと思いました」。

調理にかかわる機会は多い。タマネギの皮むきもお手のもの！

個性を自然に受け入れる

「豚はアラフの友達だから」

宗教上の理由で、豚肉を食べない子がいました。ランチのときには代替えの弁当を持参し、食育活動の際には作った物が食べられないこともありました。保育者は全く何も言っていなかったのですが、子どもたちがそのことに気づき、「アラフも食べられるものを作りたい」と、提案し始めたのです。「どういうものなら食べられるか」を調べ、分からないところは栄養士に相談しながら、自分たちで考えていきました。

話し合いの結果、決まったのは「餃子」。それぞれのクラスには食物アレルギーのある子もいるので、「みんなで食べられる餃子にしよう！」と、栄養士の協力も得て4種類の餃子を考案。土曜参観の日に、保護者と一緒にみんなで作り、みんなで食べることができました。

例年、土曜参観の日にはカレーを作っていました。なので、上に兄弟がいる保護者が子どもに「なんで餃子なの？」と聞く場面がありました。それに対しての子どもの答えは……、「豚はアラフの友達だから」。「食べちゃいけないから」ではなく「友達だから」という言い方に、異文化への尊重が自然にできていること、友達の個性を認めていることが表れていて、この子たちは本当にすごいと思いました。

「やらされる」のではなく、「やりたくなる」環境づくりを。自ら技に挑戦したくなる！

保育者のしてきたことが「生きる力」につながっていた！

栗橋さくら幼稚園では、2年前に保育理念を作り直した際、「未来を切り開いていく子どもたちに必要なのは何か」とみんなで考えました。まずは「体を作ること」、そしてそのためには「食」だという結論に。図らずも、園ではかねてより「食育」に力を入れており、また子どもたちの体力の低下を感じた保育者が流行らせた「なわとび」も文化として定着していました。「保育者が肌感覚で大事だと思ってやってきたことが、ちゃんと生きる力につながっていた」と塚越さん。目の前の子どもをよく見て、そこから考える保育者の力をあらためて感じたと言います。自粛期間中の保育を試行錯誤したのも、保育者たちの生きる力の表れ。園の子どもたちの育ちは、保育者にかかっているのです。

園で社会を生きる

（柿沼平太郎さん）